

長慶天皇の差声法

—『仙源抄』の声点をめぐって—

坂本清恵

一 はじめに

長慶天皇の著作である『仙源抄』（弘和元（一三八一）年）は、その跋文において四声にもとづく定家の仮名遣いの問題点を指摘した、定家仮名遣い批判の書として扱われてきた。長慶天皇が定家の仮名遣いを批判したのは、天皇の生まれが一三三三年で、そのころまでに起こったアクセントの体系変化、四声観や語調標示法の変化が関係するものとみられる。ところが、前稿で明らかにしたが、長慶天皇は四声にもとづく定家仮名遣いを批判しながらも、本文の「お」「を」ではじまる見出し語にはアクセント体系変化を経た天皇自身の四声（アクセント）に基づく仮名遣いを採用している。つまり、定家仮名遣いの原理どおりに実践すると定家の仮名遣いとは相違することを理解していたのである。

これまでの『仙源抄』の声点研究も定家仮名遣いを批判した跋文に限られていた。跋文には、二拍名詞第三類「神」が「かみ（平平）」、第二

類「紙」が「かみ（上去）」で示されており、この差声法が問題とされてきた。アクセント体系変化前からHLであった二拍名詞第二類と、体系変化によってLLからHLに変わる二拍名詞第三類とが合流する。その第三類が（平平）で示されるということは、アクセント体系変化前の姿を反映しているかに見える。しかし、アクセント体系変化後の『名目抄』や契沖の著述では（平平）はLLでなくHLを示す。長慶天皇は、このような新しい声点注記法を用いたのではないのか。また、アクセント変化前からHLであった第二類「紙」を（上平）ではなく、（上去）で記したのはなぜなのか。さらには、知識として持っていたアクセント変化前のLLとHLとを書き分けたのではないのか。などの問題がある。前稿では、第三類「かみ（平平）」については、本文中引用の声点に「わかむとほり（平平平濁平平）」のような平声の続く例があることから、アクセント体系変化前の資料典拠があった可能性を示した。

本稿では、これまで検討されて来なかった『仙源抄』本文中に差された声点を分析し、長慶天皇の差声方法について考察するとともに、跋文

の差声について再考を加えたい。

二 『仙源抄』諸本と声点

『仙源抄』は、原本である草稿本を長慶天皇皇子と耕雲とが別々に書写した結果、行悟本系と耕雲本系との二系統が生じたという。³⁾ 両系統の声点調査、および『仙源抄』が拠った『紫明抄』、参考にしたと言われる『河海抄』の声点調査を踏まえて、長慶天皇の差した声点がどのようなものであったかに迫りたい。

(二―一) 『仙源抄』諸本

『仙源抄』については、以下の諸本の声点を調査した。諸本の分類と記号は岩坪健(一九九四)に倣う。

耕雲本系

a 京都大学附属図書館所蔵中院文庫本

耕雲自筆本で、耕雲が応永二(一三九五)年から正長二(一四二九)年の間に、原本から直接写した可能性の高い、現存最古写本である。現状は虫損甚だしく、原本の閲覧は叶わなかったため「京都大学図書館所蔵貴重書画像」で確認した。

この系統についてはb広橋本(京都大学附属図書館所蔵)、c図書寮乙本(書陵部所蔵)、d真淳本(書陵部所蔵)、h池田乙本(天理図書館所蔵)、i池田丙本(天理図書館所蔵)、j神宮文庫本(国文学研究資料館のマイクロフィルムによる)、k類字源語本(彰考館所蔵。同前)、l天理図書館本、m金沢市立図書館本を調査した。しかし、耕雲自筆本以上の声点はなく、耕雲自筆本の本文挿入のための圈点を

声点と誤った例などもみられる。耕雲自筆本の声点のみを扱う。

行悟本系

A 実隆本(金沢市立図書館所蔵 稼堂文庫091・8 410)

C 図書寮甲本(書陵部所蔵154―16)

D 専順本(京都女子大学附属図書館所蔵『類字』(YK811R))

F 池田甲本(天理図書館所蔵(題箋「源氏いろは別言葉の解」)913・

36・イ103)

G 源語類集(京都大学附属図書館所蔵4―30ケ15)

I 東京教育大学本(ル120―190 国文学研究資料館のマイクロフィルム

による)

N 彰考館本(彰考館所蔵「源氏物語抄」)巳07745 国文学研究資

料館のマイクロフィルムによる)

耕雲自筆本の本文中に差された声点は六六箇所、跋文には本来は七箇所あったと思われるが、虫損により一例確認ができない。¹⁾ これに対して、行悟本系の差声の量は、耕雲自筆本に及ぶものがない。A実隆本の声点は二箇所のみで、跋文に声点なし。C図書寮甲本は本文三三二箇所、跋文に六箇所、合わせて三八箇所。D専順本は本文に三二箇所の差声があるが、跋文には声点なし。F池田甲本には本文六箇所、跋文に五箇所。G源語類集は本文一二箇所、跋文には声点なし。I東京教育大学本には本文四一箇所、跋文六箇所の計四七箇所。N彰考館本には本文五〇箇所、跋文六箇所の計五六箇所。

行悟本系のうち、差声の多いI東京教育大学本とN彰考館本は以下のような共通点が多い本で、次の①②から耕雲本の影響のある本と考えら

れる。

① 見出し語の配列が耕雲本と同じ点

耕雲本は「おはさうす」を見出し語にあげ、行悟本系A C Dなどは「をはさうす」を見出し語とするが、I Nとも耕雲本と同様の掲出である。

② 行悟本系には見出し語としてないものが立項されている点

行悟本にないと言われる「いむふたき」「けむい」「めしうと」が見出し語にある。

ただし、耕雲本にある「のらやふ」「もの、けいきすたま」「せうそこ」「せいさう」の見出し語については行悟本と同様でない。

③ 声点注記に他本にない注記がみられる点

ともに「おほとこのこもる（上上上上濁上濁上）」の声点があり、「も」に濁音を表す双点が差されているが、そこに「モノ声本ノマ、」と補われている。

④ 応永三年の奥書のほかに次の共通の奥書を持つ点

「経厚奥書云
此一帖号仙源抄南方撰云々 抄出等雖
多之殊以可秘藏之物也 莫忽緒而已」

鳥居小路経厚（一四七六～一五四四）は室町時代の歌人で、青蓮院の僧。『伊勢物語』『古今和歌集』の講義を行った人物である。③の注記は経厚による書き入れの可能性があらうか。

また、彰考館本には行悟本系のみある「ひたふる」の注「行吾云」の説明に「イ無之」とあり、耕雲本での校合を行っていることがわかる。行悟本系で最も差声量の多い彰考館本は他の行悟本にはなく、耕雲本と同じ声点の差された例が多いことから、声点も校合によって耕雲本から

補われていると考えられる。しかし、行悟本系としては善本とされるA 実隆本、D 専順本は跋文の声点を欠く。跋文は声点なしでは意味のないものであり、声点を写し漏らしたということは、書写者に『仙源抄』執筆における長慶天皇の仮名遣い観について、その内容を把握しようとする意識がなかったともいえる。長慶天皇の仮名遣い観、四声観を理解するうえで、跋文に声点が差され、耕雲本にない声点を持つC 図書寮甲本を行悟本系の代表とさせることができよう。

二二 長慶天皇の四声

本文の声点を分析するにあたり、長慶天皇が四声をそれぞれのよう
に考えていたのかを跋文の記述によって確認しておく。

いろはをつねによむやうにて声をさくらはお文字は去声なるへし
定家かお文字 つかふへき事をかくに山のおくとかけり まことに
去声とおほゆるをおく山とうちかへしていへは去声にはよまれす
上声に転する也 おしむ おもひ おほかた おきの葉 おとろく
なとかけり これはみな去声にあらず この内おしむは おしから
ぬといふをりは去声になる おもひも おもひくといふをりはは
しめのおもむ（ママ）しは去声のちのは去声にはよまれぬなり

入声は漢字音の場合のみであり、平上去が問題である。上声は「おく
（奥）」「古今・袖中・補忘・平節」LHが、「おく山」となると「上声に
転する」とされ、アクセント体系変化後には『正通・玉淵・脚結』HL
Lとなるので、高を示す。

去声は「まことに去声とおほゆる」とする「山のおく」「おしからぬ」
と「おもひく」のはじめの「お」である。「おく（奥）」LH、「おし
からぬ（惜）」は第二類形容詞「惜し」のかり活用でLHLLLのアク

セントである。第二類動詞の反復形の「思ひ思ひ」は副詞的な用例では、現代京都はLHLLLLである。『古今聞書』に同じ第二類動詞からの「かへすかへす」に《DUU×××》の胡麻章例があるところから、体系変化後に高起式にならずLHHLLLのアクセントであったか。これらから、長慶天皇は語頭の低を去声と考えていたと推測できる。しかし、跋文の次の記述からは単なる低ではなく上昇調を去声と考えていたようである。

一字とりても序破急といふをりは破の字平声によまれ破をひく破をふくなといふをりは去声になるたくひのことし

「破」は『観智院本名義抄』『法華経单字』で平声であるが、「序破急」としたときにHLLLであったのであろう。「破を」というときにはLHという上昇調であったので去声とする。ほかに平声についてその声調を探る手掛かりはないが、語頭以外に現れる低を平声、語頭の上昇調を去声と考えていたのであろう。

しかし、跋文には語頭ではない去声がみられる。前述した問題の「かみ」への差声である。

いつれの文字にも平上去の三声はよまるへきなり たとへはか文字とみ文字とをあはせよむにかみ(平平)神也 かみ(去上)上也
かみ(上去)紙也

去声が語頭では上昇調、語頭以外では低平調を表すことにもなると解釈せざるをえない。その場合に平声との相違はないのであろうか。とりあえずは、語頭の(平上…)は長慶天皇の差声ではないと考えてよいのであろう。また、長慶天皇はいわゆるアクセント体系変化後のアクセントを習得していたと考えられるので、語頭から低が続く(平平…)も長慶天皇自身の差声ではない。となると、目にした文献から(平平)、自

身の差声で(去上)と(上去)をという一貫しない方針での記述になった可能性がある。

なお、声点資料として用いる『紫明抄』『河海抄』は以下のものである。

『紫明抄』 京都大学文学研究科図書館蔵(国文学 Me 5)

『河海抄』 天理大学図書館蔵(91336イ357)

参考…『河海抄』 阪本龍門文庫善本電子画像集

アクセント例は秋永一枝他編『日本語アクセント史総合資料 索引篇』(一九九七、東京堂出版)で用いた略号を用いる。

三 『仙源抄』の声点注記

『仙源抄』本文の差声を見ると、清濁を標示するためのものと、語アクセントを明確にするためのものがあるが、両者とも語義を示す注であることに変わりはない。しかし、濁音を示す一文字への差声も平声、上声、去声に差し分けられており、その部分の声調を同時に示す可能性があろう。河内本系『源氏物語』には声点があり、これも同様の差声方針がみられる。ここでは、前稿で扱わなかった濁音標示が主目的である差声と一系統にしか差されていない声点についても考察を行う。

〔三―一―〕 両系統に差声のある例

跋文を除き、耕雲本と、行悟本系のうちC図書館寮甲本と差声箇所が共通する例は二八箇所ある。そのうち、濁音を示すことが主目的の差声を除くと、一七箇所が共通している。これが、長慶天皇自身の声点注記であるか。このうち、専順本に差声のあるものはすでに報告を行ったが、他の行悟本系との校異を含めて改めて分析を行う。見出しとして掲

げたのは耕雲本である。ここに取り上げたのは、行悟本系のC図書寮甲本かD専順本に差声例のあるもので、I東京教育大学本、N彰考館本だけに例のあるものは「三一—一三」にまとめた。

1 「あたけ〈上上平〉御：化アタケ日本紀」（朝顔）

右の耕雲本に対し、行悟本は「御あたけ」に差声がある。C図書寮甲本は差声がずれたようで「御あたけ〈平平〇平〉」にみえる。I東京教育大学本、N彰考館本は「御あたけ〈〇上上平〉」である。この例は『河海抄』に「いまさらの御あたけ〈〇上上濁平濁〉も 化 日本紀」（朝顔）がある。『日本書紀』諸本では差声例が確認できない。⁵⁾『河海抄』と『仙源抄』とはアクセントは同じであるが清濁が異なる。

2 「あたけ〈上上濁〇〉ふりせぬ御：あたるけのいつもたえぬといふなり」（若菜上）

耕雲本は「け」の清濁が不明である。C図書寮甲本、N彰考館本には「あたけ〈上上濁上〉」がある。『河海抄』には「そのあたけ〈上上濁上濁〉こそ あたるけなり」と、『河海抄』（乙通女）に「御あたけ〈〇上上濁上濁〉」の例もある。『仙源抄』では1の「あたけ」の次に見出しが立っており、清濁、アクセントも異なる語として立項されている。『河海抄』では1と2とはアクセントが異なるものの清濁は両例とも「あだけ」である。「あだ」は「法華・色葉・古今・袖中・平節・大観・近松・京ア」HLであり、「あだけ」はHHHのアクセントを注記したものである。

3 注「あつひ〈上上濁〇〉とよむへき歟」（濔標）

見出し語は「あつひ〈上上上濁〉給」であるが、耕雲本にしか声点がない。注部分「あつしくといへる心也／愚案定本にはあつひ給とありあつひ〈上上濁〇〉とよむへき歟」には両系統に差声がある。見出し語

の「あつび」ではなく、「あづい」を採る。C図書寮甲本、I東京教育大学本、N彰考館本はいずれも「あつひ〈上上濁上〉」の差声である。注に従えば「あつしく」は、第一類形容詞「あづし（篤）」でHHHを差したことになる。『紫明抄』『河海抄』とも当該箇所がとりあげられていないが「篤し」については『紫明抄』「あつしう〈上上濁上平〉」、『河海抄』「あつしく〈上上濁上〇〉」がみられる。第一類形容詞と同様のアクセントである。

4 「うけはり〈上上上平〉受張也諸也請也」（桐壺）

C図書寮甲本は「うけはり〈上？上上上？〉」、D専順本「うけはり〈上上上〇〉」、I東京教育大学本、N彰考館本には差声なし。注は、第二類動詞「うけ」+第一類動詞「はり」の語構成であり、アクセント体系変化前では、LLLが推定でき、アクセント体系変化後にHHHLとなったとすれば、耕雲本の差声が合致する。おそらくアクセント体系変化後の長慶天皇自らの差声であると考えてよいのであろう。なお、『河海抄』は「うけは〈上濁〉りて」と濁音標示されている。『仙源抄』では、非連濁を採用しており、『河海抄』とは異なる。耕雲本系京大本には「うけはり〈上上上濁〇〉」で濁音例に写されている。

5 「おほとこのこもる〈平上上上上濁上上〉」（桐壺など）

D専順本は耕雲本と同じ、低起式アクセントを反映している。C図書寮甲本は「おほとこのこもる〈平？上〇上？上濁上上〉」、I東京教育大学本、N彰考館本は「おほとこのこもる〈上上上上上濁上濁上〉」モノ声本ノマ、」であり、耕雲本、C、Dとは異なる差声で、マ行音に双点を差すなど不審である。「おほとこの」のアクセントについては、『源氏清濁』に「おほとのおふら〈去上〇〇〇〇〇〉」があり、アクセント体系変化後も低起式が保たれたものと、「おほとこの」にLLHL『名義 人紀』

もあるように、アクセント体系変化後に高起式のアクセントも現れた。これについては四で検討する。

6 「かたみ〈上上上〉記念」(桐壺など)
7 「かたみ〈去上上〉相互也」(帚木など)

同音異義語を続けて注記した例であり、「相互」の差声がD専順本にはないが、C図書寮甲本、I東京教育大学本、N彰考館本のいずれも耕雲本と同様の差声である。

「かたみ(形見)」『名義』古今、顕拾、浄拾、四座、謡曲、平節、近松」にHHHがある。耕雲本の「た」の声点はやや下であるが、HHHを反映するとみてよい。⁶⁾

「相互」の意味の「かたみ」にはアクセント例がないが、「片―」を語源とすれば、「かたへ(片方)」『名義』色葉、古今、LHHなど低起式であり、意味の接近した「たがひ」『名義』字鏡、巫私、古今、四座、謡曲、平節、近松」LHHのアクセントと同様であったと考えられよう。

8 「さかりは〈平上濁平上濁〉下場也 髪すそのあたり也 愚案は文字にこりてよむへき歟」(空蟬)

C図書寮甲本は耕雲本と同じ差声であるが、I東京教育大学本、N彰考館本は「さかりは〈平平濁平上〉」の差声で、「は」が清音であり、「は文字にこりてよむへき歟」とする注に合わない。D専順本には差声なし。『紫明抄』には「さかりは〈平平濁平平濁〉下場」(空蟬・帚木)の二例の差声がある。龍門文庫本『河海抄』にも二例あるが、「さかりは〈〇去濁〇上濁〉」「さかりは〈上濁〉」で、濁音のみを注記したか。『仙源抄』の差声は、「下端」の意味で「は(端)」は『巫私』袖中」にFの例があり、これを生かした上声を差したのであろう。

9 「さへ〈平濁上〉才也」(桐壺)

C図書寮甲本「さへ上濁」へ」は濁音標示のみである。他本には声点例がない。『河海抄』に「さえ〈平濁上〉」がある。『法華経单字』に「才〈去〉」の例がある。

10 「時〈上濁〉」(夕霧)

C図書寮甲本、I東京教育大学本、N彰考館本も同様で、見出し語と注記「此説のことくに時〈上濁〉とこゑによむへき歟」に差声がある。『紫明抄』に「初夜の時〈上濁〉也」とある。『法華経单字』に「時〈上〉」があり、Hのアクセントである。

11 「たつやと〈上濁上平上〉ときこえたり」(東屋)

C図書寮甲本、D専順本は耕雲本と同様、N彰考館本は「たつやと上濁〇上上」。注には「母君：屋戸宿愚案此注不分明可見合他本」とある。「母君だつやと」の説であるが、この声点では「宿」の濁音を示していない。声点も含めて「不分明」なのであろう。長慶天皇自身の声点ではない。『河海抄』には「は、きみたつやと〈〇〇〇〇上濁上平上濁〉」とある。「母君だつ」を注記するのは共通だが、『河海抄』は「やと〈平上濁〉」と「宿」の濁音を示し、声点も第四類LHで合致する。

12 「と、めし」〈上上濁上上〉」(桐壺)

C図書寮甲本、D専順本、I東京教育大学本、N彰考館本のすべてが耕雲本と同じ差声である。「人の心まけたる事は…停也或説不可留悪事於後代也しからはと、めし〈上濁〉とよむへし」と「し」の清濁二説をあげ、「愚案にこりてよむもまことに一義也しかれとも定本には人の心まけたる事はあらしとあり定家卿説におきては無異論歟」としている。「留む」は第一類動詞で声点に合致する。

13注「御たけ(○上上)」(夕顔など)

D専順本には声点がないが、他は同じ差声。次章の「三一―二」5に詳しく述べる。

14注「やむことなき(上上去濁上去上)」(桐壺)

見出しに対して、「無止事 愚案字のまゝ、にやむことなきとはよむへからす やんことなき(上上去濁上去上) とよむへき歟故人口伝也」と注部分への差声である。C図書寮甲本「やんことなき(上上去濁平○)」、I東京教育大学本「やん(上上) ことなき」、N彰考館本「やんことなき(上上去濁平去○)」である。耕雲本の(去濁上)(去上)はそれぞれ成素の頭ではあるが「こと(去濁上)」は不自然である。「やん」と連濁標示をしているにもかかわらず、成素を分かつような声点の差し方になっている。これが「字のまゝ、にやむことなきとはよむへからす」である。声点は「故人口伝」と考えられる。

15注「よきみちなむなるを」(真木柱)

二種類の解釈が示され、声点が差されている。

まず、注「能路なりよき(去上)みちとよむへし」は耕雲本、D専順本、I東京教育大学本、N彰考館本が同じ、C図書寮甲本は「よき(上上)みち」とする。「よし(良)」は第二類形容詞で、連体形LHを(去上)で示した。

続く注「又説よき(上上濁)みちといふなり 過路也」については、C図書寮甲本は「よき(上上)みち」のみが耕雲本と異なる差声で、あとは同じである。「よきる」は『法華、名義』にHHLとある第一類動詞であり、「よぎ」もHHで、高起式のアクセントが推定される。

16注「わかむとほり(平平平濁平平)」(末摘花)

この例は、「教隆説わかむとほり(平平平濁平平)」として注部分に

差されたものであり、耕雲本は「わかむどほり」と濁音を標示するが、I東京教育大学本には差声がなく、他本は(平平平平平平)と濁音標示はない。『仙源抄』で唯一、差声者がわかる例である。清原教隆(一一九九―一二六五)は、アクセント体系変化前の低平型で差声している。

教隆の説は『紫明抄』には掲載がなく、『異本紫明抄』に「或人云わかむとをりとは王孫若々しくふるまう末と稱する歟仍如聲可讀之 教隆」とある。長慶天皇が引用した『紫明抄』のこの説には声点が差されていない⁽²⁾。しかし、『異本紫明抄』については、『ノートルダム清心女子大学古典叢書第二期1 紫明抄』と書陵部本(国文学研究資料館マイクロフィルム)を確認したが、ともに「教隆説」には声点注記がみられない。「わかし(若)」は形容詞第二類であり、「とほり」は第二類動詞からの転成名詞で、複合形はLLLLLが推定される。

17「をそき(上去濁上)」(東屋)

これは語中に(去)が来る例である。D専順本、I東京教育大学本、N彰考館本は「をそき(○去濁上)」で、「を」への差声がない。C図書寮甲本はさらに「き」への差声がなく、「そ」への(去濁)が差されている。形容詞「をぞし」は「おずし」に『古語』L L Fの例があり、体系変化を経てH L Lとなると推定されるが、(上去濁上)はその中間に現れるH L Hを反映するのではないか。

D専順本にはあるが、C図書寮甲本にはない例

18「おれて(上去上濁)としふる人」(夕霧)

D専順本、N彰考館本には「おれて(上濁)」で濁音標示のみである。『河海抄』には「おれて(平上上濁)」とある。

注には「をれぬといふなり」とある。「おれて(上去上濁)」はLHH

であり、第二類動詞を注記している。注の「をれぬ」であるが、否定の「ぬ」は第二類動詞に接続すると鎌倉時代はL LHであるがアクセント体系変化を経てH LHとなる。これに対して否定助詞の「で」は接続の形は変わっても動詞部分はL Hで変化することがない。見出し語と注では、「おれで」L H Hと「をれぬ」H LHをアクセントで書き分けている。「おれで」「をれぬ」は「愚る」と解釈され、「愚る」にはアクセント例はないが、「おろく」が『名義 人紀』L L Fであり、第二類動詞としてよい。

19 「かこと〈上上濁〇〉誓言也」(桐壺)

D 専順本、N 彰考館本も同様の差声である。『河海抄』は「かこと〈上平濁上〉」。『袖中』H H Hの例がある。

20 「つしやき〈平平上平濁〉」実法心也」(真木柱)

C 図書寮甲本には声点がないが、他本は同じ差声である。龍門文庫本『河海抄』に「つしやき〈〇〇上上濁〉」がある。

21 「むくつけし〈平平平濁平〇〉」(夕顔)

D 専順本「むくつけし〈平平平濁平〇〉」、I 東京教育大学本、N 彰考館本「むくつけし〈平〇平平〇〉」。注に「蠢也貪也愚案此注猶心ゆかすや」とあり、声点についても同様に納得がいかなかったであろう。

22 注「をこり〈上上平〉」(桐壺)

「をこり」で見出しが立てられていて、注に「驕」の説のあとに、「又起といふ説あり しからはをこり〈上上平〉とよむへし愚案下説宜歟」としたもの。D 専順本「をこり〈〇上上〉」の例のみ。「起こり」は第二類動詞「起こる」からの転成名詞であり、L L L V H H L の変化をした「をこり」H H L を注記している。「起」の説を支持するために自ら差した声点であり、それに合わせた仮名遣いである。

23 「をよすけもておはする〈平平上上上上平平上〇〉」(桐壺)

D 専順本「をよすけもておはする〈平平上上上上平上上〇〉」、I 東京教育大学本、N 彰考館本「をよすけもておはする〈〇〇〇〇〇〇上上上〇〉」。耕雲本も含め、声点とアクセント仮名遣いが合わない。「およすく」は『観智院本名義』の「およす〈平平上上〉」(者)が「く」の欠如した形であれば第二類動詞であろう。「もて」は平安・鎌倉L H であるが「も」の声点はやや下、「おはする」は『名義 人紀』「おはす」L H L、『平節』にL LH H である。注がなく、声点はアクセント体系変化前のもので、移声の可能性があろう。四で改めて扱う。

〔三—一—二〕両系統に濁音標示のある例

1 「いふ〈上濁〉かし」(夕顔)

耕雲本とD 専順本にある例である。『名義』L L L F、L L H L。第二類形容詞に当たるので、アクセント体系変化後はH H L L となる。

2 「こゝろ葉〈上濁〉」(絵合)

諸本「は」の濁音標示のみである。『紫明抄』には「こゝろは〈平平上上濁〉」がある。『紫明抄』の声点は、「心」第五類L L L + 「は」は第二類Fで、L L L H のアクセントである。アクセント体系変化を経ればH H L L になり、「葉」だけに声点を差すとすれば、〈平濁〉あるいは〈去濁〉である。〈上濁〉で差されているのは、濁音のみを先行文献から移声した可能性があるか。

3 「さか〈上濁〉」(帚木)

D 専順本には声点がないが、他は同じ差声である。注「世間流布したる事也」とある。「祥・前兆」は『神紀 人紀 巫私』L L、アクセント体系変化後H L となる。これも長慶天皇の差声であれば、2 「こゝろ

葉」と同様に〈平濁〉あるいは〈去濁〉の差声が相応である。

4 「せむさう〈上濁〇上濁〇〉 軟障也」(須磨・玉鬘など)

C 図書寮甲本のみ耕雲本と同じ差声がある。「軟障センシヤウ〈上上平平平〉」『色葉』に例がある。

5 注「たけ〈去濁〇〉」

「みたけさうし」の注に「愚案御嶽とかけともた〈去濁〉けとはよます御たけ〈上上〉とよむなり」の例。耕雲本とC 図書寮甲本は同じ差声で、他は差声がない。ここでは清濁が問題で、「みだけ」ではなく、「みだけ」の読みを採用している。「岳」は古くは第一拍が清音であるが、中世辞書類に「だけ」の例がみられる。同時代に「岳」を「だけ」とするが、ここでは清音の「みたけ」を支持している。「岳」は『人紀 乾私 袖中 顕散』が LH、『平節 京ア』は HH である。濁音の「だけ」は LH を反映する去声点の可能性がある。「御たけ」は「たけ」が LH であっても接頭「御」をつけると「みたけ」HHH である。

6 「た〈上濁〉つ」(夕顔など)

諸本同じ差声。注には「冬たつ日」とあり、複合語の下部成素としての立項である。『紫明抄』に「冬たつ〈〇上濁?平〉」の例がある。濁音標示の例である。

7 「めをやた〈上濁〉ちて 女おやなり」(螢)

耕雲本とI 東京教育大学本、N 彰考館本は同じ。D 専順本には差声なし。C 図書寮甲本「めをやたちて〈〇〇〇上濁平〇〉」。『河海抄』には「めをやたち〈上上上平濁平〉」がある。

8 「をなしこ〈上濁〉と 如也」(橋姫)

耕雲本とC 図書寮甲本、N 彰考館本が同じ、他は差声なし。『ごと』は『古今 僻抄 袖中 顕拾 浄拾 西万』に HL がある。

9 「をほ〈平濁〉とか」(帚木)

耕雲本とC 図書寮甲本、D 専順本は同じ差声。I 東京教育大学本、N 彰考館本は「をほと〈上濁〉か」の差声。差声のある拍が異なる。耕雲本の注「穩也 またおほめきたる心とも愚案つねにはお、とかとよむ歟 おほつかなし下説又不審」とする。注にあるように「オオドカ」と常に読むところを「オボトカ」の双点をよしとはしていない。「穩」の意味であれば、「と」が濁音になるが、「おほめく」の意味であれば「ほ」が濁音であり、「をほとか」説を不審とするのであるから、見出し語の声点自体も移声であろう。

10 「かたほ〈上濁〉片釜」(夕顔)

D 専順本、I 東京教育大学本、N 彰考館本は耕雲本と同様。『紫明抄』に「かたほ〈平上上濁〉」がある。

11 「と〈平濁〉しき 屯食」(桐壺)

D 専順本、I 東京教育大学本、N 彰考館本は耕雲本と同様。『河海抄』「としき〈平濁平濁平〉」。「屯」は『色葉』に平声例がある。アクセント体系変化後であればHHLであるから、〈上濁〉と差されてよい例である。

12 「と〈上濁〉ち 共也」(帚木など)

耕雲本、D 専順本、N 彰考館本にあり。「どち」は『古今』にHLとHHの両様がみられ、濁音部分の声点はアクセントにも合う。『河海抄』に「女と〈上濁〉ち」の例がある。

13 「はた〈上濁〉さむき 膚寒也又説はた〈去〉さむき将也」(桐壺)

去声は、C 図書寮甲本になく、D 専順本と耕雲本は同じ。I 東京教育大学本、N 彰考館本は「はた〈去去〉」。ここでは第二拍の「た」と「だ」での清濁を注記する。清音の「はた(将)」は『古今』RH、『色葉』巫私、古今、浄拾、開合』HH、『古訓 補忘 京ア』HLである。濁音

の「肌」は「和名・医心・名義・人紀・近松・京ア」にLHとある。見出し語には「肌」のLHを反映した上声の双点が差されている。一方、清音「はた」は去声点が差されているが、アクセントを反映しているわけではなく、見出し語の濁音に対して清音であることを示したものである。I 東京教育大学本、N 彰考館本は「はた〈去去〉」も「は」「た」の両拍とも清音であることを示している。見出し語にはアクセントを反映した点を差したが、注部分では清濁のみが問題であり、濁音が上声であったために、清音注記をその対称にあたる去声位置にアクセントとは関係のない圏点を差して、清音を示したものである。

14 「は〈上濁〉ちのを」(若菜下)

耕雲本とI 東京教育大学本、N 彰考館本にある。『紫明抄』には「はち〈平濁平〉」。注に「発絃也」とある。『金光・和名・名義・色葉』にLHがあり、体系変化後はHLである。

15 「をとこた〈平濁〉うか」(末摘花)

C 図書寮甲本に声点がないが、他は耕雲本と同じ。『名目鈔』に「男踏歌(〇平平)」「ヲトコタウカ(上上上〇〇〇)」の例があり、諸本によって清濁は異なるが、HHHLのアクセントであろう。

〔三十一—三三〕 C 図書寮甲本、D 専順本に声点がない例

耕雲本とI 東京教育大学本、N 彰考館本のみ例は、耕雲本からの移声である可能性が高い。

1 「あこへ〈上上濁〇〉侍へし 過分之義也」(賢木)

I 東京教育大学本、N 彰考館本も同じ差声。これは、『河海抄』に「あこへ〈上上濁〇〉侍へし 過分義也」がある。

2 「こて〈平濁平〉給へるなり」(東屋)

N 彰考館は「こて〈平濁上〉」である。「こち也 ことよくいひこち給なり愚案ことよくいふならずともこちことこていつれも五音通するなり」とある。「こつ」は、アクセント例はないが、「事・言」の動詞化したものである。「事・言」ともに第三類で、LHであり、動詞化した場合にも低起式のLHであろう。(去濁上)の差声が予想されるところである。

3 「こて〈平濁平〉のせに」(宿木)

I 東京教育大学本、N 彰考館本も同じ差声。注には「囲碁出銭也愚案 囲碁手銭也」とある。

4 注「さうやく〈平濁平上平〉」

I 東京教育大学本「さうやく〈平濁平平〇?〉」、N 彰考館本「さうやく〈平濁平上平〉」。注部分の「又あけまきにもこよひはさうやく〈平濁平上平〉もやといへるは雑役也所にしたかふへし」に当たる。

5 「さのとき〈上濁平平〉」(浮舟)

N 彰考館本「さのとき〈上濁上平〉」。「ことし」は『名義・平節・近松・京ア』HLHLで声点どおりである。

6 「たみ〈去濁上〉たり 迂也」(玉鬘)

I 東京教育大学本、N 彰考館本は耕雲本と同じ差声である。「だむ」は『西万』にLFの例があり、この差声はLHを〈去上〉で示したものである。

7 「つか〈上濁〉せ侍る」(総角)

I 東京教育大学本、N 彰考館本も同じ差声。「常不軽なん」に続く部分である。清濁が問われる箇所「つかせ」か「つがせ」かで後者を注記している。「継ぐ」は第一類動詞でHHである。

8 「とき」(上濁)とられて」(紅梅)

I 東京教育大学本、N 彰考館本に例がある。「とき」か「とき」かで後者を注記したもの。「伽」であろうか、アクセント例なし。

〔三〕二 耕雲本にない差声

1 「かまのさう」(平濁上○○平) (東屋)

C 図書寮甲本にはなく、D 専順本の例。I 東京教育大学本、N 彰考館本には「かまのさう」(平濁上○○平)。「降魔相也」「降(去濁)」は「法華経单字」、「魔(去)」「観名」、「魔(上)」「法華経单字」。(去上)で注記されていないので、移声であろう。

2 「へ」(上濁)御：奠也」(行幸)

C 図書寮甲本の例である。D 専順本には平声の双点がみられる。『明抄』に「御へ(上濁)」の例がある。『古今集』では、「御嘗」に「おむへ(平平上濁)」「古今訓点抄」に「御嘗(上濁)」「天恵」、「御嘗(上濁)」「梅・清聞・清声」の例がある。『仙源抄』では「古今などに御へといへるは嘗義也いづれもまつる義なれば相違すまじきなり」とある。

3 「ようせすは」(平平上去濁○○) (桐壺)

D 専順本の例でN 彰考館本も同じで、C 図書寮甲本にはない。I 東京教育大学本「よくせすは」(平平去濁○○)。「河海抄」「ようせすは」(平平上濁○○)があり、L L H L L であることは、D N と『河海抄』は同じである。『仙源抄』は「すは(去濁○○)」が独立しているように差されている。

4 「をこり」(平上濁上) (桐壺)

「驕也」の見出し語に差された例で、注部分に「起といふ説ありしからはをこり(上上平)」とよむへし愚案下説宜歟」とあり、耕雲本、C 図

書寮甲本にはこの見出し語に声点がない。D 専順本、I 東京教育大学本、N 彰考館本の例である。「驕る」は第一類動詞で派生名詞もH H H で、声点に合わない。

5 「こき」(上濁)てむ」(桐壺)

D 専順本には声点がない。注では「弘徽殿勘云こうきとかきたる所もあり先達口伝両様也」とあり、「こき」か「こうき」かを取り上げている。C 図書寮甲本は上声点であるが、I 東京教育大学本、N 彰考館本は「こき(平濁)てむ」である。『河海抄』には次の声点がある。

弘徽殿(平上濁去) 後醍醐院御説

後高倉院御文庫本点也親範卿点云々

こきてん(平上平平) 源親行説 此事猶口伝アリ

C 図書寮甲本の点は『河海抄』の後醍醐院御説と同じL H L L のHの部分のみを差している。「こき」か「こき」かで説が分かれるが、「こき」説を採っている。

7 注「野分た」(上濁)ちて」(桐壺)

見出し「たつ」の注部分に「冬たつ日定家説如此可説云々きりつほに野分た(上濁)ちてこれにもこりてよむへし」とある。耕雲本には見出し語「た(上濁)つ」上声の双点があるのみで、この注には声点がない。D 専順本以外の行悟本系では、見出し語、注の両箇所の上声の双点がある。『河海抄』では「けふそ冬たつ(上濁平?)日」がみられる。「野分だつ」は、「野分」がL H L 『名義』で、「立つ」が第二類動詞であるから、L H H H L のアクセントであったか。

8 「われほ」(上濁)め 自讚也」(梅枝)

I 東京教育大学本、N 彰考館本は、C 図書寮甲本に同じ。D 専順本「われほ(平濁)め」。「我」は第四類、「褒む」は第二類動詞である。ア

クセント体系変化前にはLLLL、LLHH、LLHLが推定でき、体系変化後にはHHHL、LLLLとなる可能性がある。

9注「シハ〈平濁〉」(賢木・明石)

I 東京教育大学本、N 彰考館本のみ「し葉ふるひ人」の注に「日本紀折枝葉」の振り仮名「シハ〈平濁〉」がある。「柴」は『名義』にLHLで、アクセント体系変化を経てHLとなっても「ハ」の高さは〈平〉で示される。

〔三〕三 行悟本にない差声

耕雲本のみ例である。

1 「あつひ〈上上濁〉給 あつしくといへる心也」(霽標)

注記部分「あつしくといへる心也」愚案定本にはあつひ給とあり あつひ〈上上濁〉とよむへき歟」には両系統に差声がある。見出し語の「あつび」ではなく、「あづい」を採ろうというのであろうが、見出し語の清濁を採らないのであれば、見出しへのこの差声は、移声と考えるべきであろう。〔三〕一―一〕3で述べた。

2 「け〈上濁〉むもあらはれむかし」(真木柱)

「験」は現代京都アクセントはHL。

3注「こうりやうてん〈去上去平平去上〉」(桐壺)

『色葉』に「後涼殿〈去平〇〉」。『仙源抄』の例は、漢字の頭にあたる仮名に〈去〉が差され、漢字それぞれの声調を示している。

4 「しそく〈平平濁〇〉 親族也」(浮舟)

この項目は、行悟本では「しそく 指燭也」と同項目に加えられており、独立していないが、耕雲本は別立てされている。「親族」のアクセント例はないが、『色葉』「親〈平〉」「族〈入濁〉」、「親王」は『名目』

LHL、『平節』LHLHの例がある。

5 「まくなき〈上平上去濁〉 定家説また、き歟」(明石)

「まくなき」は「定家説また、き歟云々瞬メマシロクめくはず也摩愚那岐日本紀」と注記される。『日本書紀』人皇卷諸本は〈平上上平〉である。『紫明抄』には「瞬マシロクメクハス 摩愚那岐〈平上濁平平濁〉日本紀」とある。同じ「日本紀」の声点を引くが、古くは「まくなき」で同源の虫名としては『和名 人紀』にLHL、『名義』にLHLの例がある。「ま」に「目」の意識があれば、低起式のアクセントが保たれるのであろうが、『仙源抄』の声点は高起式で二語にとらえた「まくなき」で、『紫明抄』とは異なる。龍門文庫『河海抄』に〈平平濁〉上去濁〉がある。

6注「お〈上〉はしませなり」

耕雲自筆本のみみられる。これは「おはさうす」(帚木)の注の部分である。「おはす」は『名義 人紀』にLHLがある。専順本では見出し語「をはさうす」、注「をはしませなり」で配列も異なっている。

7 「こ〈上濁〉となる」(橋姫)

「こと」には『古今 僻抄 袖中 頭拾 浄拾 西万』HLの例がある。

8 「さ〈平濁〉け 邪気也」(柏木)

アクセント例がない。

9 「さとひ〈平濁〉あ中ひたる也」(玉鬘)

「里」第一類、動詞「さどぶ」も第一類動詞同様で連用形はHHL。

10 「しほ〈平濁〉ちの女 新発也」(若紫)

『河海抄』には「しほ〈平濁〉ちの 新発意」がある。古いアクセント例はない。

11 「と〈上濁〉しみ 御…試業事也」(少女)

『河海抄』に「と〈上濁〉しみ」の例がみられる。

12 「ひなひ〈平濁〉たる 夷也る中ひたる也」(未摘花)

「ひなふ〈上上平濁〉」「古今(毘 高貞)・勢語」、HHLのLを〈平濁〉で示したものである。龍門文庫本『河海抄』には「ひなひ〈去濁〉たる」の例があるが、これは濁音であることを示しただけのものであろう。

13 「まけ〈上濁〉させ給 枉也曲也」(桐壺)

「まぐ」HL『名義・古語』など。第一類で、「さす」が下接して「まげ」HHである。

14 「をのかし、〈○○○去濁平〉」

注「各競ヲノカシ、日本紀 又各自恣 万ニハ各寺師」「をのかし、」は、『浄拾』にHHHLの例があるが、注からは「をのか」と「し、」と形態素を分けて、その後部の頭に〈去〉を置いた例とみられる。「自恣」か「寺師」かは不明である。

「をのかし、」は『紫明抄』では巻ごとに取り上げたと思われるほど頻繁に立項されている。語構成に問題を感じたのであろうか。龍門文庫本『河海抄』に「をのかし、〈○○○平濁平〉」の例があるが、これとは異なる差声である。

四 差声の考察

三で声点全体について検討したが、長慶天皇の自らの差声か、典拠あつての移声かについてまとめてみる。稿末に三で分類した声点を表にし、『紫明抄』『河海抄』などを参考にした可能性がある場合と、注から明らかな典拠があるかを示した。典拠がある場合には○、典拠はあるが

『仙源抄』と相違する場合には×を、声点については「移声」、清濁については「清濁」欄に付けた。

〔四一〕 移声かどうか

声点には、先行文献から移声されたものと、長慶天皇の解釈に拠って新たに差されたものが見受けられる。見出し語に声点が差されているからといってすべてが長慶天皇の解釈に基づくものではない。

例えば、〔三一—二〕22、〔三一—二〕4で取り上げた「をこり」をみる。「をこり か、る事の…驕也 又起といふ説あり しからはをこり〈上上平〉とよむへし、愚案下説宜歟」と耕雲本にある。専順本には見出しにも「をこり〈平上濁上〉」の差声がある。「驕る」は第一類動詞であり、その転成名詞「驕り」はHHHであるから、専順本の見出しの声点は不審である。「驕り」は、〈上上濁上〉が差されるべきであり、仮名遣いは「をこり」でよい。〈平上濁平〉であれば、見出し語の仮名遣いも「おこり」として、配列も変更されなければならない。注の「起り」は「起る」が第二類動詞であり、その転成名詞はLLL∨HHHの変化をするので、〈上上平〉は長慶天皇のアクセントであり、それに拠った仮名遣い「をこり」である。

しかし、濁音標示のための差声である〔三一—二〕9「をほ〈平濁〉とか 穩也 またおほめきたる心とも愚案つねにはお、とかとよむ歟おほつかなし下説又不審」とあるように「オオドカ」と常に読むところを「オボトカ」が見出しに立っており、差声は自らのものではない。

差声者が明確に示されているのは清原教隆による「教隆説わかむとほり〈平平平濁平平〉」である。長慶天皇はアクセント体系変化後の生育と推定され、語頭から平声が続く〈平平…〉のような差声には他から

の引用の可能性が高い。例えば、〔三―一―一〕21「むくつけし〔平濁平〇〕蝨也貪也愚案此注猶心ゆかすや」は、声点も差しながら注の説には納得していないと記すのは、声点も含めて他からの引用と考えられる。また、〔三―一―三〕2「こて〔平濁平〕給へるなり」のようにLHが推定されるところに〔平平〕が差されており、契沖のような新しい差声法によりHLを示すものではない。これらからも〔平平…〕は移声とできよう。

次に、参考にした『紫明抄』『河海抄』と同じ語に差されいながら、異なる差声のものをみる。

〔三―一―一〕18「おれて〔去上上濁〕が『河海抄』で「おれて〔平上上濁〕」(愚)となっている。語頭のLHに〔去上〕と差すのは新しい注記である。『仙源抄』ではアクセントによる仮名遣いの解釈として、

しはらくいろはをつねによむやうにて声をさくらはお文字は去声なるへし定家かお文字つかふへき事をかくに山のおくとかけりまことに去声とおほゆるを…

のように去声を「お」で書くと考えていた。これによれば、アクセント体系変化後の低起式の語頭には去声点が差されることになる。よって「おれて」のLHに『河海抄』の〔平上〕ではなく、自らの四声観に合った〔去上〕を差したのである。この項目は前述したとおり、注「をれぬといふなり」のように否定の助動詞「ぬ」がついたときには、第二類動詞に接続し、古くLHであるものが、アクセント体系変化によりHLLになり、「をれて」の仮名遣いになる。この例のごとく語頭の上昇調を〔平上〕で差したものは、長慶天皇によるものではなく、〔去上〕が長慶天皇の差声である。

ところで、見出し語に声点があるだけで、注のない項目については、

長慶天皇自身の差声とみてよいのだろうか。

注を持たない見出し語に差声のみの例は、アクセント仮名遣いと関わる「おほとのこもる〔平上上上上濁上上〕」と「をよすけもておはする〔平上上上上平上〇〕」である。両例とも問題をもつ。

まず、「おほとのこもる」については両系統とも出現順が「をほとか」「おほとのこもる」「をほち」で「を」の配列のなかに位置している。自らのアクセントでは「をほとのこもる」とすべきであったが、引用したものが「おほとのこもる〔平上上上上濁上上〕」であったため、そのまま写してしまったのではないか。「おほとの」にはアクセント体系変化前にLHL『名義』、アクセント体系変化後にHLHL『脚結』の例がある。前述したとおり長慶天皇は去声を「お」と考えており、この例は自らのアクセントを差したのではなく、見出し語も「をほとのこもる」に訂正されるべきものであろう。

「をよすけもておはする」は両系統とも出現順では「をかしき」「をよすけもておはする」「をたき」の順であり、位置に問題はない。「をよすけ」の「を」に対して平声が差されているのが問題である。長慶天皇は「を」を上声と解釈していたので仮名遣いに合わない。差された声点〔平上上上上平上〇〕はアクセント体系変化前のものであるが、「をよすけ」はLHLHからHLHLに変化したため「を」で表記したのであろう。これも長慶天皇自らのアクセントを差したものではない。

この二例はアクセントによる仮名遣いが採られているために配列も問題になる。他に配列で問題なものとしては、耕雲本系「おはさうす」が行悟本系では「をはさうす」として配列が大きくずれる例がある。

耕雲自筆本は「おはさうす おはしますなりおはしまさへ」とあるはお〔上〕はしませなり」とあり、諸本中、唯一声点がある。しかし、声

点どおりであれば、上声点が差されているのであるから、「をはしませなり」となるはずである。これに対して専順本は「をはさうすをはします也をはしませへとあるはをはします也」とある。耕雲系と専順本とはどちらかが改訂を加えたものなのであろう。声点が後ならば、専順本が訂正後のものである。

〔四―二〕語頭以外の去声点

語頭以外に去声点が差されるのは、両系統に共通するものである。用例から見ていくと、『仙源抄』の去声点は、語頭に差された場合には長慶天皇の四声観に基づいた自らの差声であるとみてよい。しかし、問題は語頭以外の去声である。

「はた〈上濁〉さむき 膚寒也 又説はた〈去〉さむき将也」は、「た」の清濁の違いを示しただけで、濁音を左上、清音を右上と左右対称の位置に示しており、去声の声調を表していない。それぞれの注記の目的によって声調を示さない圈点もみられる。

語中、語末の去声点で特筆すべきは、「まくなき〈上平上去濁〉定家説また、き歎云々瞬メマシロクめくはず也 摩愚那岐 日本紀」(明石)で、耕雲本のみにある差声例である。『紫明抄』では「摩愚那岐〈平上濁平平濁〉」、龍門文庫本『河海抄』には「まくなき〈平平?濁上去濁〉つくりて」とあり、「く」の右側に「スム」と書き入れられ、注には「摩愚那岐〈平上濁上上〉 日本紀」とある。『日本書紀』諸本に「摩愚那岐〈平上上平〉」がみられ、差声が異なる。耕雲本のみ二拍めが清音であり、『河海抄』の書入れに合致する。アクセントは同源の虫名がLHHL『和名・人紀』、LHLH『名義』である。跋文の「紙」に差された〈上去〉がHLを示すと考えると、耕雲本の声点では「まく〈上平〉と「なき〈上

去濁〉」とに分かれているかのようにみえるが、LHLHからHHLHをへてHLLHとなる中間のアクセントが現れたか。アクセント変化の途中とみられるのは、この例と「三―一―一」17「をそき〈上去濁上〉」である。去声点が語頭以外に差された場合も低を示してはいるのだから。

〔四―三〕濁音標示について

語義解釈のためにのみ清濁を示した差声には〈去濁〉の例は一例のみである。これは、「三―一―二」5で扱った「愚案御嶽とかけともた〈去濁〉けとはよます御たけ〈上上〉と読むなり」という長慶天皇の差声である。「嶽」LHの語頭の上昇を表すもので、清音との対比で差されている。

濁音を示すだけの差声の多くが〈上濁〉の例である。個々の例は検討したとおりであるが、濁音標示のための声点の場合には上声位置に双点を差した可能性もあろう。語頭の平声双点は典拠があつての差声で、移声であろう。

五 おわりに

『仙源抄』の本文に差された声点について考察を行ったが、長慶天皇が自らのアクセントを差したものと、出典があつて移声したものがあつたことは分かったが、その判断はむずかしい。注の中には明らかにアクセント体系変化後のアクセントを差したものがみられ、天皇自身の差声と認められるものもある。それでは、問題の跋文における「かみ」への差声についてはどう考えたらよいか。

本文の差声からも〈平平〉は長慶天皇自身の差声法ではなく、新しい

声点注記法でHしを示したのではないといえる。天皇自身がどのような音調であると理解していたかはわからないが、古い文献に拠ったものである。これに対して、〈去上〉〈上去〉は天皇の差声としてもよさそうである。同音異義語を平上去で書き分けるために自身の差声法ではない古い差声法も採用したのであり、体系変化前の古いアクセントで生育したとか、古い音調を知識として知っていたというものではない。

【注】

- (1) 坂本清恵「仙源抄」とアクセント仮名遣い―長慶天皇はわかっていた―『国文目白』四九(二〇一〇・三)
- (2) 金田一春彦「国語のアクセントの時代的変遷」『国語と国文学』三五―一〇(一九六〇・一〇)、『金田一春彦著作集』第九巻 玉川大学出版部二〇〇五・九に所収
- 馬淵和夫「定家かなづかいと契沖かなづかい」『続日本文法講座2表記編』明治書院(一九五六・六)
- 前田富祺「近世における国語アクセント観」『国語学』七一(一九六七・一一)
- 望月郁子「仙源抄」跋文の語調標示の方法とその発想―去声の体言とその派生語における―『常葉女子短期大学紀要』五(一九七四・三)六(類聚名義抄の文献学的研究)笠間書院 一九九二・二に所収
- 上野和昭「四声観と定家仮名遣批判」『新編荷田春満全集月報』一一(二〇〇九・六)
- 川上葵「契沖のアクセント表記法」『日本近代語研究』五(二〇〇九・一〇)
- (3) 岩坪健「仙源抄」の系統『親和国文』二九(一九九四・一二)〔源氏物語古注集成21 仙源抄〕おうふう一九九八・二
- (4) 跋文「又一文字にては 木葉」の「は」の上声点位置が虫損のため。「葉」は第二類。
- (5) 鈴木豊編『日本書紀人皇卷諸本 声点付語彙索引』アクセント史資料

索引一九(二〇〇三)

- (6) 『源氏物語古注集成21 仙源抄』の翻刻では「かたみ(上平上)」とする位置に圈点が付されているが、字母「多」の第二画の上ならば、上声点、下ならば平声点とできよう。

かたみ (上上上)

かたみ (上平平)

- (7) 堤康夫「異本紫明抄」編者に関する一考察―清原教隆との関係を中心にして―『國學院雜誌』八八一―(一九八七・二)によれば、『異本紫明抄』には教隆による注記が一五六項目みられ、「今案」注記者が教隆と直接問答を行うなど、非常に関係が深かったという。

- (8) 『文明本節用集』『印度本節用集』『書言字考節用集』に「ダケ」が見られる。
- (9) 『源氏物語古注集成21 仙源抄』の翻刻は「をほど(上濁)か」とする圈点があるが、「ほ」の平声双点なので、「おほ(平濁)とか」とすべきである。

をほど

〔三――一〕 両系統に差声のある例

仮名遣	箇所	耕雲本	専順本	図書寮甲本	東京教育大学本	彰考本	紫明抄	河海抄	移声	清濁
あたけ	朝顔652.11	「あたけ〈上平平〉」	なし	○上上平	○上平?平	○上上平	なし	○上平濁平	○	×
あだけ	若菜上1033.2	「あだけ〈上上濁○〉」	なし	上上濁上	なし	上上濁上	なし	上上濁上濁	○	△
あづい	滂標483.13	注「あつい〈上上濁○〉とよむへき歟」	なし	上上濁上	上上濁上	上上濁上	あつしう〈上上濁上平〉	あつしく〈上上濁上○〉	○	○
うけはり	桐壺23.3	「うけはり〈上上上平〉」	上上上○	上?上上上?	なし	なし	なし	うけは〈上濁〉り		×
おほとのごもる	桐壺13.12 若紫191.12	「おほとのごもる〈平上上上濁上上〉」	平上上上上濁上上	平?上○上?上濁上上	上上上○上濁上濁上	上上上上上濁上濁上	なし	なし		
かたみ	桐壺13.3	「かたみ〈上上上〉」 「記念」	上上上	上上上	上上上	上上上	なし	なし		
かたみ	帯木50.6	「かたみ〈去上上〉」 「相互也」	なし	去上上	去上上	去上上	なし	なし		
さがりば	空蟬87.9	「さがりは〈平上?濁上上濁〉」	なし	平上?濁上上濁	平平濁上平	平平濁上平	平平濁上平濁	なし		○
ぎへ	桐壺20.13 など	「さへ〈平濁上〉才也」	なし	上濁○	なし	なし	なし	平濁上	○	○
じ	夕霧1313.13	「時〈上濁〉」	なし	上濁	なし	なし	上濁	なし	○	○
だつやと	東屋1839.13	「たつやと〈上濁上平上〉」	上濁上平上	上濁上平上	なし	上濁○上上	なし	たつやと〈上濁上平上濁〉	○	×
とどめし	桐壺14.14	「と、めし〈上上濁上上〉」	上上濁上上	上上濁上上	上上濁上上	上上濁上上	なし	なし		×
みたけ	夕顔118.4 手習1989.11	注「御たけ〈○上上〉」	なし	○上?上	○上上	上上	なし	なし		
やんごとなき	桐壺5.1	注「やんごとなき〈上上濁上上上〉」	なし	上上去濁上上	上上○○○	上上去濁上上	なし	なし	○	○
よきみち	真木柱939.1	注「よき〈去上〉みち」	去上○○	上上○○	去上○○	去上○○	なし	なし		
よきみち	真木柱939.1	注「よき〈上上濁上上〉みち」	上上濁○	上上○○	上上濁○○	上上濁○○	なし	なし		
わかむどほり	末摘花202.1	注「わかむどほり〈平平平濁上平〉」	平平平平平	平上?平平平	なし	平平平平平	なし	なし	○	○
をぞき	東屋1825.10	「をそき〈去上濁上〉人」	○去濁上	○去濁○	○去濁上	○去濁上	なし	なし		
おれで	夕霧1312.12	「おれで〈去上上濁〉としふる人」	○○上濁	なし	○上上濁	○上上濁	なし	平上上?濁	×	○
かごと	桐壺15.9	「かごと〈上上濁○〉誓言也」	上上濁○	なし	なし	上上濁○	なし	上平濁上	×	○
つしやぎ	真木柱947.9	「つしやぎ〈平平上平濁〉」	平平上平濁	なし	平平上平濁	平平上平濁	なし	なし		○
むくづけし	夕顔121.5	「むくづけし〈平平平濁上平〉」	平平平濁上平	なし	平○平平○	平○平平○	なし	なし	○	○
をこり	桐壺5.8	注「をこり〈上上平〉」	○上上	なし	なし	なし	なし	なし		
をよすけもておはする	桐壺7.14	「をよすけもておはする〈平平上上上上平上上〉」	平平上上上上平上上	なし	○○上上上○	○○上上上○	なし	なし	×	×

〔三――二〕 両系統に濁音標示のある例

仮名遣	箇所	耕雲本	専順本	図書寮甲本	東京教育大学本	彰考本	紫明抄(京大本)	河海抄	移声	清濁
いぶかし	夕顔107.13	「いぶ〈上濁〉かし」	いぶ〈上濁〉かし	なし	なし	なし	なし	なし		

こころば	絵合557.12	「こ、ろ葉〈上濁〉」	こ、ろは 〈上濁〉	こころは 〈上濁〉	こ、ろは 〈上濁〉	こころは 〈上濁〉	こ、ろは 〈平平上濁〉	なし		○
さが	帯木35.3	「さか〈上濁〉」	なし	さか〈上濁〉	さか〈上濁〉	さか〈上濁〉	なし	なし		
ぜむざう	須磨435.1 玉鬘732.11 など	「ぜむざう〈上濁○ 上濁○〉」	なし	ぜむざう 〈上濁○上濁○〉	なし	なし	なし	なし		
だけ	夕顔118.4 手習 1989.11	注「たけ〈去濁○〉」	なし	た〈去濁〉 け	なし	なし	なし	なし		
だつ	夕顔145.12 桐壺11.7	「た〈上濁〉つ」	たつ〈上濁○〉	た〈上濁〉つ	た〈上濁〉つ	た〈上濁〉つ	なし	なし		○
めをやだち て	蛩810.3	「めを(越)やた 〈上濁〉ちて」「女 おやなり」	なし	めをやたち て〈○○○ 上濁平○〉	めをやた 〈上濁〉ちて	めをやた 〈上濁〉ちて	なし	めをやち 〈上上上平濁 平〉		○
をなしごと	橋姫1530.9	「をなしこ〈上濁〉 と」	なし	をなしこ 〈上濁〉と	なし	をなしこ 〈上濁〉と	なし	なし		
をほとか	帯木42.7	「をほ〈平濁〉とか 穏也」	をほ〈平濁〉とか	「をほ〈平濁〉とか」	をほと〈上濁〉か	をほと〈上濁〉か	なし	なし		○
かたぼ	夕顔103.7	「かたほ〈上濁〉」	かたほ 〈上濁〉	なし	かたほ〈上濁〉	かたほ〈上濁〉	かたぼ〈平? 上上濁〉	なし		○
どしき	桐壺26.7 など	「と〈平濁〉しき」	と〈平濁〉しき	なし	と〈平濁〉しき	と〈平濁〉しき	なし	どしき〈平濁 平濁平〉		×
どち	帯木61.13	「と〈上濁〉ち 共 也」	と〈平濁〉ち	なし	なし	と〈上濁〉ち	なし	なし		○
はだ	桐壺11.7	「はた〈上濁〉さむ き」	なし	なし	はた〈上濁〉さむき	はた〈上濁〉さむき	なし	なし		
はた	桐壺11.7	注「膚寒也 又は た〈去〉さむき」	注「はた 〈去〉さむき也」	なし	はた〈去 去〉さむき	はた〈去 去〉さむき	なし	なし		
ばち	若菜下 1151.5	「は〈上濁〉ちのを」	なし	なし	は〈上濁〉ちのを	は〈上濁〉ちのを	ばち〈平濁 平〉	なし		× ○
をとこだう か	末摘花 227.14	「をとこた〈平濁〉 うか」	をとこた 〈平濁〉 うか	なし	をとこた〈平濁〉 うか	をとこた〈平濁〉 うか	なし	なし		

〔三一一三〕 C 図書寮甲本、D 専順本に声点がない例

仮名遣	箇所	耕雲本	専順本	図書寮甲本	東京教育大 学本	彰考本	紫明抄 (京大本)	河海抄	移 声	清 濁
あごへ	賢木379.4	「あごへ〈上上濁○ ○〉侍へし」	なし	なし	あごへ〈上 上濁○〉侍 へし	あごへ〈上 上濁○〉侍 へし	なし	あごへ〈上上 濁○〉	○	○
ごて	東屋1802.3	「ごて〈平濁平〉給 へるなり」	なし	なし	なし	ごて〈平濁 上〉給へる 也	なし	なし		
ごて	宿木1771.6	「ごて〈平濁平〉の せに」「囲碁出銭 也」	なし	なし	ごて〈平濁 平〉のせに	ごて〈平濁 平〉	なし	なし		
ごうやく	帯木60.8 など	注「さうやく〈平濁 平上平〉」	なし	なし	さうやく 〈平濁平平 ○?〉	さうやく 〈平濁平平 上〉	なし	なし		
さのごとき	浮舟1916.4	「さのごとき〈上濁 平平〉」	なし	なし	なし	さのごとき 〈上濁上平〉	なし	なし		
だみ	玉鬘725.2	「たみ〈去濁上〉た り」「迂也」	なし	なし	たみ〈去濁 上〉たり	たみ〈去濁 上〉たり	なし	たみて〈平濁 平○〉	×	○
つかせ	総角1656.3	「つか〈上濁〉せ侍 る」	なし	なし	つか〈上濁〉 せ侍る	つか〈上濁〉 せ侍る	なし	なし		
とき	紅梅 1454.11	「とき〈上濁〉とら れて」	なし	なし	とき〈上濁〉 とられて	とき〈上濁〉 とられて	なし	なし		

〔三-二〕 耕雲本にない差声

仮名遣	箇所	耕雲本	専順本	図書寮甲本	東京教育大学本	彰考本	紫明抄(京大本)	河海抄	移声	清濁
がまのさう	東屋1828.4	なし	かまのさう<平濁上〇〇平>	なし	かまのさう<平濁上〇平平>	かまのさう<平濁上〇平平>	なし	なし		
べ	行幸887.11	なし	へ<平濁>	へ<上?濁>	なし	なし	なし	なし		〇
ようせずは	桐壺6.12など	なし	ようせずは<平平上去濁〇>	なし	よくせずは<平平平去濁〇>	よくせずは<平平上去濁〇>	なし	ようせずは<平平上平濁〇>	×	〇
をこり	桐壺5.8	なし	をこり<平上濁上>	なし	をこり<平上濁平>	をこり<平上濁平>	なし	なし		〇
こぎてん	桐壺	なし	なし	「こき<上濁>てむ」	こき<平濁>てん	こき<平濁>てん	なし	こぎてん<平上平平>		
だつ	夕顔145.12など	なし	なし	注「野分た<上濁>ちて」	野わき<上濁>たちて(「き」にミセケチ)	野わきた<上濁>ちて	なし	なし		
われほめ	梅枝985.2	なし	われほ<平濁>め	「われほ<上?濁>め」	われほ<上濁>め	われほ<上濁>め	なし	なし		
しば	賢木359.6 明石453.9	なし	なし	なし	枝葉<平濁>	注「枝葉(シハ)<〇平濁>」	なし	なし		

〔三-三〕 行悟本にない差声

仮名遣	箇所	耕雲本	専順本	図書寮甲本	東京教育大学本	彰考本	紫明抄(京大本)	河海抄	移声	清濁
あつび	滯標483.13	「あつひ<上上上濁>給」	なし	なし	なし	なし	あつしう<上上濁上平>	あつしう<上上濁上平>	〇	〇
げむ	真木柱935.9	「け<上濁>むもあらはれむかし」	なし	なし	なし	なし	なし	なし		
こうりやうてん	桐壺7.10	注「こうりやうてん<去上去平平去上>」	なし	なし	なし	なし	なし	なし		
しぞく	浮舟1871.9	「しそく<平平濁〇>」「親族也」	なし	なし	なし	なし	なし	なし		
まくなぎ	明石477.11	「まくなき<上平上去濁>」	なし	なし	なし	なし	摩愚那岐<平上濁平平濁>	なし	×	×
おはしませなり		注「お<上>はしませなり」	なし	なし	なし	なし	なし	なし		
ごと	橋姫1530.8	「こ<上濁>となる」	なし	なし	なし	なし	なし	なし		
ぎけ	柏木1239.2	「さ<平濁>け」	なし	なし	なし	なし	なし	なし		
さとび	玉鬘741.1	「さとひ<平濁>」	なし	なし	なし	なし	なし	なし		
しばち	若紫153.8	「しば<平濁>ちの女」「新発也」	なし	なし	なし	なし	なし	しば<平濁>ち		〇
どしみ	少女707.12	「と<上濁>しみ御…試業事也」	なし	なし	なし	なし	なし	と<平濁>しみ		〇
ひなび	末摘花219.6	「ひなひ<平濁>たる」	なし	なし	なし	なし	なし	なし		
まげ	桐壺14.14	「まげ<上濁>させ給」	なし	なし	なし	なし	なし	なし		
をのかじし		「をのかし、<去濁平>」	なし	なし	なし	なし	なし	をのかし、<〇〇〇平濁平>	×	〇